

[優秀賞]

房谷 史恵さんレビュー (秋田市)

書評対象図書

早坂 隆 著『ルーマニア・マンホール生活者たちの記録』(中公文庫)

マンホールの蓋が開くとき

マンホールの下に何があるのか、普段私達は考えたりしない。なぜなら、マンホールの下にあるのは私達が必要としないものだからだ。汚水。錆と埃まみれの配管。鼠。私達が使い回し、垂れ流したもの。

そこに子どもが住んでいる。

ルーマニアでマンホール生活を送る子ども達と共に過ごした著者が、そこでの暮らしを綴ったのがこの本だ。

チャウシェスクによる独裁政治が貧困を生み出し、子どもを含む大量の人々が家庭や社会からはじき出され、住み処を失い、マンホールの下に居場所を求めた。もちろん地下にはトイレも風呂場も台所もない。食べ物も排泄物も混じり合った中で心身を病みながら、それでもどこにも行く場所のない子ども達と著者の交流の日々。

この話の結末に、救いはあると思うだろうか。日々の不安と絶望からシンナーや犯罪に手を出し、ますます痛めつけられていく子ども達に。生を受けた瞬間から差別され、暴力と排除の果てに瞳の輝きを失っていく子ども達に。

地下に押し込められた、私達が必要としないもの。

そうやってマンホールに住んでいた子ども達は、ある日突然消えた。子ども達の住んでいた一帯のマンホール生活者が警察の摘発にあい、マンホールの蓋が溶接され開かなくなっていたのだ。著者は以降、交流していた子ども達とは誰一人として出会えていない。

この本は20年以上も前に出版された本だ。そんな昔に出された、日本とはなじみの薄いルーマニアという国の実情に、なぜこんなにも衝撃を受けるのか。汚物の中で歌い、笑いながら子ども達が交わした儂い約束に、こんなにも胸を打たれるのはなぜなのか。

マンホールの下には、本当は何があったの。

私達がそれを知ることはできない。なぜなら、そこに子ども達を押し込めたのは私達だからだ。私達の無意識が、無関心が、無知が、子ども達をそこに押し込めて、蓋をした。

この本は、マンホールの蓋を少し開けてくれる。その隙間から中を見て、そこからまたその蓋を、私達はどうするつもりなのだろうか。